



スライムぱにつく！★お試し版

意馬心猿

主人公…リリカ♀

人と魚人族の混血

両性型（ふたなり）

栗色の髪、淡い灰色の瞳

お相手…メイ♀

人と猫獣人の混血、白い耳尻尾

白い毛、緑の瞳

ナターシャ♀

金髪碧眼の巨人族

リリカに、つまみ食いされる

タリカ♀

人と魚人族混血

リリカと二卵性の姉

栗色の髪、淡い灰色の瞳

クロード♂

褐色エルフ

熊の獣人との混血

タリカの番

銀髪、金色の瞳

モブ1…謎の四人組

モブ2 .. 親子三人組

父カルロス、息子兄カシス、
娘妹ホシス

モブ3 .. その他

リリカの憂鬱 前編

昔姉が誕生日にくれた杖が少し痛んできたので修繕したいと思い武器屋に行く。と素材要求があり少なくとも『一角兎の角』が無いと駄目との事だった。なので探しに森へ向かう。向かうが臭いに敏感で警戒心の強い一角兎は全く姿を現さない。前日、白人参を置いて罌を仕掛けてみたが人の臭いに警戒してだろう野ざらし状態で粘ったものの駄目だった。

「うーん……」

粘って探し続けた為に休憩も取っていない。日が暮れそうなか、疲れた足を動かしてリリカは少し開けた土の地面を探していた。人道から外れた場所での地面を探し見つけて、そこに木の堀棒を刺して土を掻き出す。一つ魔物避けを

置いて下着を下ろし服を巻くつて腰を穴に近付けた。

シャーシャージョロロロ。

勢い良く出るのは尿。溜まりに堪った尿を出しながら、リリカは息を吐いた。
「はー……よかった……ひゃっ!」

しかし驚きの声を上げるリリカ。何か股の間に張り付いたからだ。尿が出ているままだったが慌てて飛び退くリリカ。しかし目にしたのは、あまり湿つてない掘った穴がある姿と張り付いた感触が消えないままの股。外套を、ガバリツと捲る。

「え？ あ、スライム!? んっ、あ、あうっ♡」

夕暮れが近い日の下でスライムが尿を吸って、ぷるんっぷるんっ揺れている。股に、しっかりと張り付いたスライムは、離れない。手で触っても伸びる

ばかり。尿も止まらないしリリカは酷く焦った。

「だ、だめっ、なにこれっ♡ うや……っはあ……っ♡」

魔物避けをしたのに真下にいたという事は最初から土の中にいたスライムなのだろう。透明で全く気付かなかった事に混乱する脳で後悔したが遅い。スライムは妙に喉が渴いている様子でリリカの尿だけでは飽き足らず下半身に身を広げ水分を探し皮膚や敏感な部分で蠢いている。

「な、なにつ、なんか、く、くる……っ♡ きちやうっ♡」

リリカが中腰になり腰を震わす。唐突に生まれた快感にリリカは腰を抜かした。

「……んっ♡ やだあ……まだ動いてる……っ♡」

スライムはリリカの割れ目を前後でなぞり尿道の穴には細く身を伸ばして入り込んでくる。

「ひっ♡ そんな……そんなところ……っ♡ むりい……♡」

混乱するリリカだったが水分を探し続けるスライムは行動を続け彼女の膣内や後ろの穴にまで身を伸ばして入り込んでくるではないか。

「そ、そんなあ……あうっ♡ しよこっ、だみや……っう♡」

真つ朱になって顔を横に振るがスライムは止まらない。普段は、キュツと閉まっている尻穴に細い糸状で、するすると入り込んだかと思うと中でスライムは身を大きくしていく。増える圧迫感に、リリカは急激に訪れた排泄物への衝動を感じた。

「く、くる……し……い……あ、あ……♡」

身の半分ずつを前後に擦りついたまま、スライムは液体や養分となるものを身に入れていく。地面に身を倒したりリリカは無造作に開いた脚のまま、また下半身が痙攣するのを感じた。

「あ……あう……ふあ……ん♡」

涎を垂らしながら、リリカは、どうにかしなければと震える手で魔法瓶を取

り出しスライムの近くで水を流す。するとスライムは、それに反応して、そちら側に身を向け水分を吸収した。身から外れていくスライム。完全にスライムが水を浴びて、リリカから離れれば彼女は息を吐き上半身を起こし腰が抜けた下半身を自分の片手で揉んだ。

「……お、おそろしい……」

どうも土の中に居たと予想するなら中で乾燥して眠りについていたのかもしれない。普通は乾燥して核が潰されれば死んでしまうが、ここは元、小川が流れていた地に見える。残されたスライムが土の中で長年仮死状態で生き残っていたのではと推測した。

「……ま、まあ、スライムで良かったか。他の魔物に比べたら、ほ、ほぼ……無害だし……うん……」

一時程休憩して気を取り直し下着を履き外套の土汚れを払い帰ろうとするリリカ。水分をあげて満足したのか静かになったスライムを後目に軽くなった身

で歩き出す。

しかし。

ポヨーン。

一歩進むとスライムが隣に飛び平行してくる。数歩進み距離を取ろうとするが。

ポヨ、ポヨ、ポヨーン。

隣に付いてくるスライム。

「……まさか」

一分ぐらい歩いてみるリリカ。スライムは身を、ぷるんっ、ぷるんっとなわ

せて、どこまでも付いてきた。

「……気に入られたの？」

しゃがんでスライムを指先で突いてみる。透明な身が、ぶるんつと揺れた。真ん中の核だけが、ほわほわ光って反応は静かなものだ。

「うーん……？」

手に持ってみる。ほわほわとした光。

「この感じは、まさか……」

リリカは、ごくりと喉を鳴らして呟いてみた。

「……な、汝、私の眷属になる事を望むか。望むのならば、その身を渡したまえ……なんちゃって……」

スライムが、ぶるんつと震え光り輝く。

「え、え？」

核の色が変わったかと思うと半分に分れて、それがリリカの身に入り込んだ。

「あ……できちゃった……」

それは文献で読んだことのある魔物を使役する誓約の言葉であり相手が受け入れた場合のみだが魂の欠片を貰え今後は仲間となる。これは稀な事であり、リリカは何故か、よほど気に入られたのか誓約が成功したのだった。

「使役技能かくそうかく名前は……スライムだから、スラ！ 宜しくねスラちゃん」

ほわほわとスライムの核が光り身も心なしに嬉しそうに揺れている。

「うーん！ なんだか可愛いぞスラちゃん」

頬すりをして歩きながら柔らかな身を堪能し持っているとき少し大変なので外套の帽子部分にスライムを入れて帰宅したのだった。

「ただいまゝ」

「お帰りなさい、リリカ。今、お米を炊いているところよ」

「ありがとう。じゃあ……副菜は……今、姉さんが用意してくれてる芋と燻製

肉があるか……」

「近所の方から茄子を貰ったんだけど」

普通に姉タリカと共に台所にいる番の雄。姉の番のクロードが茄子を洗ってトゲトゲのへたの部分の刃物で取っている。

「じゃあ、ご飯もあるし何かの肉と一緒にあんかけ風にしますか」

「今日、トーイノの若い雌肉を狩って降ろして一部、持ち帰ったよ」

「わ、また。凄いねクロードさん」

「リリカちゃん……」

「はい？」

少し難しい顔をしたクロードがリリカに目を向けて言う。

「兄さんと呼んでくれないかい？」

「……………う、あ、はい。クロードお義兄さん」

「お、は要らないよ」

「あゝはい。徐々に」

「うん、宜しく」

嬉しそうに微笑むクロード。姉も嬉しそうである。リリカは新しく出来た姉夫婦に少し苦笑いを浮かべつつ晩ご飯の用意をし始めたのだった。

間*****

リリカの憂鬱 後編

「メイって言うにや！ よろしくにやーん！」

「か、可愛いっ！ あ、リリカって言います！ 宜しくお願いします！」
人型よりの猫型獣人のメイに挨拶されリリカも言葉を返す。

「リリカも可愛いにや〜！」

可愛い少女の頭に白い耳が、ふさふさ揺れて尻尾がふりふり揺れている。耳と尻尾以外は人と変わらない見た目の可愛い子に、リリカの胸の鼓動を高くする。リリカは惚れっぽかった。

「あれ!? 今日は新しい子と一緒になの? え、良いね……」

「あ、じゃあ夜にさ僕らと晩御飯食べに行かない? 良い店知ってるんだ」

昼からの交代で終わりダンジョンに行くと、メイと共に声をかけられるリリカ。断ってメイとの甘い一時を過ごそうと口を開いたリリカは衝撃を受ける。
「だーめっ! メイはリリカとスキスキするにやん! オスはお呼びじゃにやいっ!」

「にやんって! 可愛いな!」

「この、あざといの堪らん……っ」

ぎゅうっとメイに抱き締められて溶けそうになる、リリカ。

「俺らともスキスキして〜！」

「嫌にや！」

「僕、魚の美味しい店知ってるよ！」

「さかにや！ 店は聞くけど、リリカとメイと二人で行くにや〜」

「そう言わずにさ……」

「美味しい鰹節あげるよ……？」

「ふにや〜……分かってにやいにや……」

男二人と攻防を繰り返していたメイはリリカに向くと丸く緑色の瞳をキラキラと光らして顔を迫る。

ちゅ。

「……え」

「わ、わお」

目を丸くして固まる男達。

「……」

至近距離で見つめ合うメイとリリカ。

……ちゅ。ちゅぷ。にゅちゅ。にゅちゅり。

気が付けば唇が取られて逆らわない、リリカの奥に舌が入り込んでザラツとした舌触りが腰に甘さを感じさせた。しばしの後に、ハツとしてメイが顔を上げる。

「メイはっ！ メスが大好きにやん！ オスは無理にやん！ さよにやら！」
ぶんすこしたメイに手を引かれ頬を染めて夢心地で付いていくリリカ。それを見ていた男達は、よくわからない叫びを上げて気付くと見えなくなっていた。

下の階まで進んだ先でメイが謝罪してくる。

「ごめんにやつ！ ちよつと抵抗が無いから気持ち良くて調子のつちやつた！」

「え、いえ！ 私も最高に気持ち良かったです！」

「にゃん!?」

「あ……でも女性が好きってのは演技でしたか……?」

涙目になりながら、リリカがおそろのおそろ聞くとメイは顔を朱くし横に振る。

「メスが好きにや……」

「……そ、そうなんですネ……あの……」

「……にゃ」

「もう一度、ちゅーしても……?」

「にゃん……」

四階階段下で唇を、そつと合わせる二人。柔らかな感触にリリカは歓喜した。

続きは本編で！

スライムぱにつく!★お試し版

発行日 2021 年 8 月 3 日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
